

# 平成29年度第1回農業大学校外評価委員会

## 議事録

I 日時 平成29年5月29日(月) 10:00~12:00

II 場所 大分県立農業大学校 会議室

III 参加者 外部評価委員

教育関係者	大分県高等学校教育研究会農業部会 会長 (大分東高等学校長)	甲斐 良治 氏
生産者	大分県指導農業士会 会長	藤野 渉 氏
〃	大分県農業法人協会 会長	増田 徳義 氏
〃	地元女性農業者	古庄 京子 氏
卒業生	大分県立農業大学校同窓会 副会長	湯浅 正徳 氏
農業団体	大分県農業協同組合常務(営農担当)	坂本 茂則 氏
行政	豊後大野市 農業振興課長	赤峯 浩 氏
〃	大分県中部振興局 生産流通部長	三浦 敏郎 氏

農業大学校

校長、副校長、次長、農学部長、研修部長、教務課担当

IV 次第

1 開会 (進行:橋本次長)

2 校長あいさつ

農業大学校は大分県の農業・農村の将来の担い手となる人材を育成するという大きな使命を担っています。外部評価委員会の皆様にはその取り組みを細かく評価していただきながら内容を改善し、より農業大学校を魅力あるものにしていくためには是非皆様のご助言・ご指導いただきたいと思っております。

3 委員紹介

4 本校職員紹介

5 大分県立農業大学校評価制度について

副校長より資料P2~P6を説明

6 議事 (議長:田中委員長)

(1) 報告事項

①平成28年度の重点目標に対する取り組み結果

運営方針1「活気あふれる学園づくり」、運営方針2「質の高い教育の提供」、運営方針3「新規就農者の確保」の取り組み結果について校長より説明。

②平成29年度 大分県立農業大学校の概要

「学校運営体制」 「農学部学生の状況」 「研修部研修生の状況」について校長より説明。

(2) 審議事項

平成29年度 運営方針を踏まえた数値目標と主な対策

運営方針1「活気あふれる学園づくり」、運営方針2「質の高い教育の提供」、運営方針3「新規就農者の確保」の方針に沿って、今年度の具体的な取組と数値目標等について校長より説明。

《質疑・応答》

(三浦委員)

運営方針を踏まえた数値目標として基礎学力を備えた入学生60名の確保としていますが、中部振興局管内に占める学生の割合が高く中でも大分東高校からの入学生が多く、在籍する各学年の学生とも1

0名以上であります。しかし現3年生の農業大学校への進学希望者が少ないと聞きましたが過去2年間の卒業生と現3年生の違いは何でしょうか。

(甲斐委員長)

農業系の生徒に対して早期より農業に興味・関心を持たせる教育的指導が必要だと考えます。そのため1年次にどれだけ農業に関わる体験をさせることができたかにあります。学校での授業だけでなく先進的な農業をされている農家の方を招き、興味・関心を持たせるお話をいただき、専門性を高めることへの意識をもたせることに繋がってくるかと思えます。そのため今、農業大学校に在籍している大分東高校出身の学生にはそういった教育活動が十分行われていたからだと思えます。

今年度の大分東高校2年の生徒が行うインターンシップでは、農業に関わる内容で計画を立てています。そこで農家の方より農業に関わるお話を聴くことにより、生徒も農業に対する姿勢も変わってくるのではないかと考えます。

大分東高校としては農業大学校への入学生を10名以上を送り出すことは、常に目標として進路指導を行うことは今後も変わりません。

(永楽副校長)

農業大学校の2年生の大分東高校出身者は大分東高校農業科の1期生です。その当時の大分東高校は進学校で、就職への受け皿が皆無であり生徒の進路保証に対し、その当時危機感を感じていました。そのため非農家の生徒が多い中、次のステップとして考えた場合、専門性を活かせる農業大学校への進学を強く指導してきました。ただ今年度の3年生には今までになかった他の農業系の学校とのつながりが強くなったことや、農業大学校との距離が遠いこともあり大分東高校との連携が薄い状況にもあることから、農業大学校の存在感を示すことが出来なかったことにあります。これから大分東高校の進路指導の中で農業大学校の位置付けを確たるものとし、農業大学校の存在感を生徒へ示していくため大分東高校との連携を強くしていく必要があります。

(甲斐委員長)

大分東高校には普通科と農業科があり圧倒的に農業科の方が人気があり、倍率も高く優秀で意欲の高い生徒が入学しています。そのため早期からしっかりと進路指導を行うことによって農業大学校へ優秀な生徒を多く送ることができるのではと考えます。そのためにも高大連携など新しい取り組みを行う必要があります。

(湯浅委員)

推薦入学の中で3名の不合格者が出ているがどういった理由でしょうか。

(永楽副校長)

不合格者を出したくありませんでしたが合格基準に満たなかったため、やむ得なく不合格者をだしました。入学生には数学の苦手な学生もいますが、1年次に基礎数学を履修させ、基礎的な数学に関する学習について学ばせプロジェクト活動の中で活かせるような教育課程としています。

(甲斐委員長)

高校の中でも学力差が激しい状況にあり、小中学校でも学力差が激しく苦勞されています。学力の低い生徒に対しても十分に高校側で指導を行い、そういった生徒が農業大学校を希望しても通用できるような学力を付けさせていきたいと考えています。

(永楽副校長)

今年度の入学試験について補足させていただきます。今年度、農業系高校からの入学生の割合が66%で、各学校とも優秀な学生が入学しています。そういった中で農業系の高校には今後も60%以上の入学生を送っていただけるようお願いしています。また、本校から4年制大学への編入学が可能であることから、それを目的に本校に入学してきた学生が2名います。また工業系の高校からも実家が畜産を営んでいることから本校に入学した学生もいます。今後も農業大学校にはそういった進路もあるということを通じて普通科等の高校にもアピールしていきたいと考えています。

(三浦委員)

今春、農業大学校から4年制大学に編入した卒業生が県職員に採用され、中部振興局に配属されています。農業者の育成の観点から外れるかもしれませんが、農業大学校から4年制大学に進学できることから、そういった卒業後の進路もあることを今後の学生募集の中でしっかりPRしていくと良いのではと思えます。

(永楽副校長)

卒業生の状況について農業大学校側としては情報を入手しにくいので、今後も何かあれば教えていただきたいと思います。高校の進路指導の中で農業大学校卒業後の進路について気になるところでもあります。農業大学校としては、本来農業者の育成としては外れるかもしれませんが、編入学を旨とする学生が入学することにより、学生全体の学習意欲の向上に繋がってくると考えられます。

(坂本委員)

例年80%近い学生が就農していますが、その後の定着状況について学校では把握をしているのでしょうか。

(小野校長)

卒業生の定着状況については、毎年7月から8月にかけて、職員で手分けし就職先に出向き、卒業生のその後の様子について聞き取りを行っています。近年どこの大学でも定着率について問題となっていますが、本校でも定着率が5・6割程度であります。定着率が低い原因の一つとして基本的な生活習慣が身につけていないことがあります。昨年度までは寮生活を学生の自主性を元に運営し、朝晩の点呼等も行っていませんでしたが、点呼を行うようになり、学生指導の内容についても見直し、学生が規則正しい生活が送れるよう指導しています。

(赤峯委員)

豊後大野市でも新規就農者の育成や親元就農について力を入れています。そういった中で、農業大学校と連携し就農支援を行っていきたいと考えています。

(小野校長)

研修部の研修生の中で、夫婦で来られている方もおり、本校で学ばれた後は豊後大野市でピーマンの栽培をしたいと考えているようなので、是非そういった方に支援をお願いしたいと思います。

(永楽副校長)

今年度学生募集については、各市町村やJA、高校生が多く利用する主要な駅に依頼し、学生募集用ポスターの掲示していただけるよう準備をしています。

(藤野委員)

毎年、先進農家等体験学習で学生を受け入れているが、鎌や鍬の扱い方、紐の結び方など基本的な作業が出来ない学生が多い状況です。またそういった学生に限って夜更かしをするなど生活習慣が乱れている傾向にあるので事前に指導してほしい。

(永楽副校長)

先程校長より説明があったとおり、学生の自主性を重んじた一般的な大学のやり方で寮生活や学習指導を行ってきましたが、強制力がないため問題が生じていました。そのため学生指導や寮生活について見直しを行い、学生に基本的な生活習慣を身につけさせるような取り組みを行っています。またこれまで自主的な学習時間を確保するため、水曜日の午後の実習を実施していませんでしたが、昨年度の途中より実習を実施するようにし、知識や技術の向上につながるよう実習の時間を確保しています。また今年度の新任の職員に対して農業大学校でやるべき内容について、統一した意識のもと継続的に実施されるよう話をしています。

### (3) その他

(甲斐委員長)

先週、全国の農業系高校の校長が集まる会議があり、その中で2020年に実施されるオリンピック・パラリンピックで選手や関係者への安全・安心な食材の提供を行うため、全国の学校でも学習の一環としてGAPに取り組んでほしいとの要請がありました。その中で、高校で初めてグローバルGAPを取得した五所川原農林高校の取り組みについて紹介がありました。この高校では教師主体の取り組みではなく、生徒が主体となり、日々の取り組みや審査などを行い、海外でのプレゼン等も行っています。こういった一連の取り組みができるのは、事前の学習や、また海外での取り組みもあることから英語の学習など学生自ら行うことにより出来ることであり、こういったGAPへの取り組みについても学習の一環として各農業系高校でも実践してほしいとの話がありました。